



全労生・事務局長

久保 直幸

1959年のヨーロッパ生産性本部ローマ会議報告において、生産性とは「何よりも精神の態度であり、現存するものの進歩、あるいは不断の改善を目指す

実また優れていようとも、かかる現状に対する改善の意志である。それはまた、条件の変化に経済社会生活を不断に適應させていくことであり、新しい技術

されない将来不安など、生産性の精神を損ないかねない日本の現状には大いなる懸念がある。こうしたことから、年間活動テーマを「生産性運動の基盤再

役の働き方（仮称）」、「労使協議制の社会的拡がり」、「公正取引の実現」などの部会の調査・研究活動、中央討論集会、ユニオンカレッジなどの具体的活

9年に発した50周年宣言では、生産性三原則が誠実に履行されているとはいいたいとして、政労使が原点に立ち返ることを求め、生産性三原則の今日的意義と解釈、今日的労使関係のあり方、ディールメントワークの確立などを訴えた。60周年に向けて、50周年宣言を含めて過去の活動を振り返りつつ、先述した生産性の精神を日本社会にいかにも実現するか、の観点から広く検討を進めていく。

## 17年度の年間活動テーマを確認—生産性三原則の徹底

去る6月13日に第1回中央委員会を開催し、2017年度の活動計画を確認した。活動計画の前提となる基本認識を次のとおりとした。

す精神状態である。それは、今日は昨日よりもより良くなし得るという確信であり、さらに、明日は今日に優るといふ確信である。それは、現状がいかにも優れたものと思われ、事

と新しい方法を応用せんとする不断の努力であり、人間の進歩に対する信念である」としている。

しかし、雇用形態や企業規模間などの格差の拡大と固定化、解消

以上を踏まえ、「これからの雇用・労働政策のありかた（人が主

と新しい方法を応用せんとする不断の努力であり、人間の進歩に対する信念である」としている。

しかし、雇用形態や企業規模間などの格差の拡大と固定化、解消

以上を踏まえ、「これからの雇用・労働政策のありかた（人が主

1959年に組織されたが、2年後の2009年には全労生結成60周年を迎える。200

か、の観点から広く検討を進めていく。